

エリウゲナの思想に関するヨーク (York) 大学の M・ヘレン (Herren) とパリの国立科学研究所の E・ジョノー (Jeauneau) の論文は、それぞれエリウゲナの詩的作品の源泉と形態及びヨハネ福音書の序文に関するエリウゲナの説教の後代の解説集と引用を考察している。

G. L. Bursill-Hall, Sten Ebbesen
and E. F. Konrad Koerner (eds.):
*De ortu grammaticae. Studies in medieval grammar
and linguistic theory in memory of Jan Pinborg.*
Amsterdam, 1990, pp.x+372.

加藤雅人

本書は、その題名にもあるとおり、中世の言語論・論理学研究の第一人者でありながら1982年に享年45歳の若さで亡くなった Jan Pinborg (1937-1982) への追悼論文集で、いわゆる「アムステルダム言語学研究叢書」の *Studies in the History of the Language Sciences* シリーズの一冊として刊行されている。編集責任を負うのは、同シリーズの監修者 Konrad Koerner (Univ. of Ottawa), 思弁文法学の研究で有名な G. L. Bursill-Hall (Simon Fraser Univ. Vancouver, B. C.), 故人の同僚で共同研究者としても知られる Sten Ebbesen (Univ. of Copenhagen) の3人で、その他20名が論文を寄稿している。以下の文章は、(1) Ebbesen による Pinborg の人物についての回想記、(2) Bursill-Hall による Pinborg の業績についての解説文、(3) 寄稿論文の概観、(4) 書評者のコメントの順に進められる。

(1) Ebbesen の回想記 (pp. 2-5) によれば、Pinborg はデンマークで生まれ、同国で教育を受け、同国出身の中世のスコラ学者の未刊著作の編集と研究のために、その短い人生の約半分を Univ. of Copenhagen で過ごした。彼は大学でいわゆるクラシシスト (a classicist) としての訓練を受けたが、同時に優秀なラテニスト (a Latinist) でもあり、ラテン語の文法や文体に大なる興味をもった。また、現代の一般言語学、哲学・哲学史、大学制度史などにも関心を寄せた。1962年に学士号を取得し、Danish Society of Language and Literature (DSL) の研究助手、Univ. of

Copenhagen の古典学助教授などを経て、1967年博士号を取得し、1973年弱冠36歳にして教授となる。1972年から亡くなる1982年まで、人文学部の Institute of Greek and Latin Medieval Philology (IGLMP) の所長を務めた。彼は亡くなるまでの短い研究期間に実に90もの著書・論文を発表したが、決してそれを見せびらかすタイプではなかった。また、若い研究者を非常に親切に指導したので、国内外から多くの学生や研究者が彼の周りに集まり、亡くなる前の10年は Univ. of Copenhagen の中世哲学研究は大いに発展した。

外部環境もまた彼の研究に味方した。彼が所長を務めた IGLMP は、中世に強い関心をもつ二人の古典学教授によって1958年に創設された。その内の一人が Pinborg の師 P. J. Jensen であった。また Pinborg が助手を務めた DSLM は、1940年代に *Corpus Philosophorum Danicorum Medii Aevi* の刊行を決定し、未刊テキストの編集を進めていたが、その指導者で思弁文法学の研究者であった Henrich Roos, S. J. によって Pinborg は中世言語論の研究へと導き入れられた。そして、さらに Univ. of Copenhagen の言語学研究の伝統も彼に影響を与えた。つまり、古典学と言語学・論理学とを結合するという方法を、彼は先輩の J. Christensen から学んだ。

彼は国際的にも積極的に活動した。1970年代に European Symposia on Medieval Logic and Semantics の創設に加わり、またその頃から北米の学者との交流も盛んにやった。1982年にニュージーランドへ中世論理学についての講義と討論のためにかけたのが、国際的活動の最後となった。

(2) Bursill-Hall の解説文 (pp. 5-12) によれば、中世が言語学史上の黄金時代であったことは今や周知であるが、そのことを当時の文法学、論理学、大学制度、写本などの研究を通じて明らかにしたのが、Pinborg であった。彼の主な業績は本書の pp. 13-16 にまとめられているが、もっと詳しい業績一覧は N. J. Green-Pedersen, "Bibliography of the Publications of Jan Pinborg", *CIMAGL* 41 (1982), VIII-XII にある。

中世の言語理論の研究に不可欠な仕事は、未編集の写本の批判校訂版の刊行であるが、Pinborg のこの点での貢献の代表的なものは、ダキアのポエティウス『表示の諸様態あるいはプリスキアヌス大文法学問題集』(1969年) やラドルプス・ブリト『プリスキアヌスの文法学問題集』(1980年) などである。また、不適切な箇所誤って配置されていた写本の修正配置も重要な仕事であるが、この分野でも Pinborg は多

くの貴重な仕事を残している。こうした分野での Pinborg 等の業績の蓄積のおかげで、今日、中世の言語論に関する知識は、1960年代のそれとは比較にならないほど増大した。

Pinborg の貢献は以上にとどまらない。中世の言語論には、文学と論理学の親近性という特徴があることを彼は明らかにした。中世の文法理論の発達は、ドナトゥスやプリスキアヌスの文法書の写本テキストに書き込まれた11世紀の「小文字」(minuscule) 注解に始まり、コンシュのギョムがプリスキアヌス文法を批判した12世紀初頭から14世紀中頃まで、文献研究や語学教育から独立した文学、いわゆる思弁文学の時代が続く。この発達については Pinborg の『中世における言語理論の発達』(1967年)に明らかにされている。この思弁文学も14世紀初めにはその限界が明らかとなり、やがて論理学が支配するいわゆるノミナリストの時代が到来する。この間の事情は Pinborg の『中世の論理学と意味論』(1972年)に詳しい。そして『ケンブリッジ後期中世哲学史』(1982年)において、彼は以上のすべての研究を総合した。彼は中世の言語理論の発展の大筋を示し、今後詳論されるべき問題を明らかにした。その意味で、現在および将来、中世の言語論を研究するものは誰でもみな、彼の影響下にあると言える。

(3) さて、寄稿論文の主題を順次概観する。Hans Arens (Bad Hersfeld) : アウグスティヌス『教師論』の真作性について(独語), E. J. Ashworth (Univ. of Waterloo) : Domingo de Soto (1494-1560) の記号論について(英語), B. Carlos Bazàn (Univ. of Ottawa) : 有限な「ある」と無限の「ある」をめぐる(仏語), Francis P. Dinneen, S. J. (Georgetown Univ.) : ペトルス・ヒスパヌスの *Suppositio* 論をめぐる(英語), Niels Haastrup (Roskilde Univ. Centre) : 土着語文法へのラテン文法の影響について(英語), D. P. Henry (Univ. of Manchester) : マギステル・ペトルスの *Sententie* とされる一節の真の著者がペトルス・アペラルドゥスであるかどうかをめぐる(英語), Even Hovdhaugen (Univ. of Oslo) : ロジャー・ベーコンにとって普遍文法は、通説とは違って、周辺的問題であったということについて(英語), Colette Jeudy (C.N.R.S., Paris) : ドナトゥスの *Ars Minor* に対する匿名の注解(未編集)について(仏語), L. G. Kelly (Univ. of Ottawa) : エルフルトのトマス『表示の諸様態あるいは思弁文学』における動詞の *compositio* という表示様態について(英語), C.H. Kneepkens (Univ. of Nijmegen) : 12世紀の構文論における他動詞・自動詞・

再帰動詞の概念について (英語), Vivien Law (Sidney Sussex College, Cambridge Univ.): アウグスティヌスの文法学において「ことば」に効力を与えるものは *ratio-auctoritas-consuetudo* の順序であるということについて (英語), Alain de Libera (EPHE, Paris): ロジャー・ベーコンとオセールのランベルトにおける *determinatio* の理論について (仏語), A. Charlene McDermott (City College of New York): アリストテレス『分析論前書』のなかの三段論法に関する一節に対するカンブソールのリカルドゥスの注解の英訳と彼の論理学について (英語), James J. Murphy (Univ. of California, Davis): *Topos* と *Figura* の歴史的・語源的関係について, Claude Panaccio (Univ. du Québec à Trois-Rivières): オッカムにおける *suppositio naturalis* と *significatio* の概念についての De Rijk の見解への挑戦 (仏語), W. Keith Percival (Univ. of Kansas): イタリアの古典学者 Remigio Sabbadini が 1960年の論文 “Elementi nazionali nella teoria grammaticale dei Romani”, *Studi italiani di filologia classica* 14, pp. 113-125. のなかで引用した文法学の断片的なテキストの写本の活字化について (英語), Irène Rosier (CNRS, Paris) & †Jean Stefanini (Univ. de Provence, Aix-Marseille): ラテン文法, 特に思弁文法学における *pronomén* と *nomen generale* について (仏語), Aldo Scaglione (New York Univ.): ダンテの『饗宴』と『神曲』における文法学の位置について (英語), Mary Sirridge (Louisiana State Univ.): ラテン語における文法的には容認されないが文脈的に理解可能な構文についての ロバート・キルウォードビーの説明について (英語), John A. Trentman (Huron College, Univ. of Western Ontario): スアレスにおける「言葉のごまかし」と「知性の言葉と話し言葉の関係」について (英語).

(4) 最後に, 書評者のコメントを述べる. もちろん, 個々の言語理論の研究は, 厳密なテキストクリティックに基づかなければならない. しかし, 中世の言語論を研究する場合, 忘れてはならない大前提がある. それは, 中世における言語論の著しい発達は中世の思想家たちの神学的関心と関係がある, ということである. 彼らが神について正確に語るための前提として, 日常言語レベルを越えた厳密な言語理論, すなわち, 名指しの手続き, 構文論, 文とその構成要素に関する意味論, 哲学的論理学が要請された. 彼らが音韻論や表記法, 諸言語の多様性や歴史的発展, といった現代の言語学にも必須の分野を扱っていないのも, 彼らの関心が, たんなる現象としての言語事実の観察ではなく, 神への通路としての言語の深層構造にあったからである.